

共に育み 未来につなぐ

# 長野県の 生物多様性



長野県環境保全研究所



## 生物多様性とは



地球上には、約3千万種ともいわれる多くの生き物が生きています。これらの生き物は、それぞれの進化の歴史をもつ固有の存在です。生命は地球上に誕生してから約40億年の進化の歴史を歩んできたといわれます。生き物はこのような歴史的背景を持ちながら、それぞれが特徴（個性）とはたらき（機能）を持ち、互いに多くのつながり（関係性）を持っています。そうしたつながりから地域固有の生態系が生まれます。この「個性」と「つながり」、その「はたらき」をさまざまな側面からとらえたものが生物多様性です。

生物多様性は、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性の3つのレベルでとらえることができます。これらは生物の進化が生んだ歴史的な遺産です。

### 生態系の多様性

高山、森林、里山、草原、河川、湖沼など、各地にいろいろなタイプの自然環境があることをいいます。各地域には、それぞれの環境に応じた生態系が成立します。



### 種の多様性

哺乳類や鳥類などの脊椎動物、昆虫類や貝類などの無脊椎動物、植物、菌類など、さまざまな生物の種が生息・生育していることをいいます。



タカネヒカゲ（ハケ岳亜種）



### 遺伝子の多様性

同じ種の中にも遺伝子に違いがあることをいいます。例えばイワナでは、生息場所が日本海側のイワナと太平洋側のイワナではその斑紋に違いがみられます。また、同じ種のチョウであっても、翅（はね）の斑紋が少しずつ異なる場合があります。

タカネヒカゲ（北アルプス亜種）

長野県内には、各地域の環境に応じたさまざまな生態系があります。そのそれぞれに多種の生き物が生息・生育しています。



## 生物多様性のめぐみ

私たちの生活は生き物のめぐみによって支えられています。

### 食べ物や木材

食料、木材、燃料など、私たちは多くの資源を生き物から得ています。農業は多くの生き物の中から人間にとって有用な種を選抜し、交配することで進歩を遂げてきました。農業や林業の生産の基礎を支えるものとして生物多様性は重要です。



山菜



クリタケ



ストーブ用薪



クリ



杉材のテーブル・椅子



地蜂(クロススメバチ)

### 機能や形の利用

医薬品の中には生物由来のものが多く利用されています。生薬として直接利用されるものもあり、長野県ではキハダ、クマザサ、クロモジ、ゲンノショウコなどが採取されています。現在利用されていない生き物にも、薬効成分の発見や技術開発により、将来において利用される可能性が秘められています。

水をはじくハスの葉の構造を真似た撥水性の布や、静かに飛ぶフクロウの羽根の先端の構造を真似たパンタグラフなど、生き物の持つ機能や形は工業

技術に応用されています。これをバイオミミクリー（生体模倣）といいます。



キハダ



ゲンノショウコ



御射鹿池

### 環境基盤・調整機能

森林が水源をかん養し、土砂災害を防ぎ、光合成により二酸化炭素を吸収するなど、生き物は自らの働きでその環境基盤を整え、私たちの生活へのめぐみの土台を形づくっています。

### 文化や景観、精神的価値

生き物はときには信仰の対象や心を癒す景観となり、日常生活に潤いや安らぎを与え、子どもたちの探究心や想像力を養うなど、文化的・精神的な価値をも有しています。

また、身近な生き物を素材として、さまざまな食文化や伝統工芸、伝統行事などが育まれてきました。これらは地域の生物多様性とともにも育まれてきた個性豊かな文化です。生物多様性と文化とのつながりを「生物文化多様性」といい、持続可能な地域づくりに役立ってきました。

**生物多様性を守ることは、私たちの暮らしやその基盤を守り、安全で豊かな生活を送る上で非常に大切なことです。**

竹細工  
立科町朴葉巻  
木曾町笹寿司  
飯山市

盆花 飯綱町



## 生物多様性の基盤環境

長野県には山岳や渓谷、河川、湖沼、盆地などの多様な環境があります。多様な生息環境があるということは、それだけ多様な生き物が生息することを意味します。多様な植物があり、多様な動物が存続するためには、個々の生息地の環境が多様性と回復力の両方を持ちながら維持される必要があります。

### 地形・地質が生み出す生物多様性の特徴



氷河擦痕の残る羊背岩(白馬岳)



氷期遺存植物ウルップソウ(青)とハクサンイチゲ(白) 白馬岳



ライチョウ(常念岳)

長野県の多様な生き物の存在には、大きな標高差をもつ複雑な地形と多種多様な地質の分布が影響しています。また、高山植物のように特徴的な分布を示す種の存在には、石灰岩や超塩基性岩のような特異な化学組成の地質の存在や、火山活動や氷期・間氷期に伴う海水準変動の繰り返しなどの長い地質時代にわたる激しい地史的な変化や出来事が背景となっている可能性が高いと考えられています。

また、険しい山岳やなだらかな高原が渓谷や盆地によって分断され、それらが県内各地にモザイク状に分布するという地形的特徴もあります。過去に生き物が気候変動などの大きな環境変化を受けた場合に、この地形的特徴が新たな生息・生育適地を近くに提供し、種の絶滅を防ぐ役割を果たしたと考えられています。

### 気候が生み出す生物多様性の特徴



ブナの優占する日本海型ブナ林(鍋倉山)

植物の分布は気候の影響を強く受けます。なかでも、温度や積雪深は植物の生育にとって重要です。標高が高くなるほど気温が低くなり、それに応じて生育する植物の種類が変わります。また積雪の多い地域では雪の重みに耐えられる植物がみられます。

南北に長く、山岳域を多く有する長野県では、海からの距離など地理的な位置や標高が温度や積雪深の分布に影響し、それが地域ごとに特徴的で多様な植物に深く関わっています。日本海側では雪が多く、トガクシソウやシラネアオイなど日本海側の地域だけに分布する植物が見られ、植生でも日本海型ブナ林と呼ばれるタイプのブナ林が見られます。一方、内陸では乾燥や雪の少ない気候を反映してブナが少なくなり、ミズナラなどの他の広葉樹林へ置き換わります。日本海側と内陸や太平洋側でのブナ林の違いには、気候と関連して乾燥した地域での山火事の影響も関連しているとも考えられています。



シラネアオイ



トガクシソウ

## 動植物の分布の特徴

### 植物

長野県では維管束植物（被子植物、裸子植物、シダ植物）が4,548種類確認されています（2017年）。コマウスユキソウやヤツガタケキンポウゲなど、世界で長野県にのみ生育している固有種もあります。



コマウスユキソウ

### 哺乳類

哺乳類は長野県内で50種が確認されています。本州に生息する中・大型哺乳類はすべて県内にも生息しており、いずれの種も数多く生息しています。小型哺乳類は、山地帯や亜高山帯に生息する種が多いことが特徴です。本州の山地帯に生息するミズラモグラ、中部山岳の亜高山帯以上に生息するアズミトガリネズミは、いずれも日本固有種で、県内で生息が確認されています。



カヤネズミ

またコウモリ類は、日本に生息する33種のうち、15種が県内で確認されています。とくにクビワコウモリは、繁殖集団が確認されているのは日本全国でも乗鞍高原のみであり、2022年に確認された上高地の集団と合わせ、大きな集団は長野県でのみ確認されています。

### 魚類

魚類では約40種（亜種を含む）が長野県内で確認されています。一般に湖沼や河川の中下流域ではウグイやギンブナなどのコイ科の魚類が、上流域ではヤマメ（アマゴ）やイワナなどのサケ科の魚類が生息しています。



イワナ

### 鳥類

鳥類では330種が長野県内で確認されています。日本列島周辺にのみ生息する固有種では4種（ヤマドリ、キジ、アオゲラ、カヤクグリ）が県内に生息しています。



ライチョウ



シノリガモ

南北アルプスなど中部山岳の高山帯に生息するニホンライチョウはライチョウの中でも世界最南端に生息する集団です。近年、南アルプス北部など一部の山岳で個体数の減少が著しく、雌の成鳥1羽が最近確認された中央アルプスでの野生復帰事業など保護対策が精力的に行われています。

また、長野県では過去には普通に見られたアカモズが野辺山高原では消失し、近年生息確認された中南信の農耕地でも減少が激しく絶滅が危惧されています。一方で、これまでは冬鳥であったジョウビタキがハヶ岳山麓や乗鞍高原などで定着繁殖が確認され、東北信の溪流ではシノリガモの繁殖が確認されています。

### 昆虫類

長野県には暖かい場所を好む種と寒い場所を好む種の両方が生息できる環境があり、全国のなかでも多くの昆虫類を確認することができます。

チョウ類は県内で148種が確認されており、亜高山帯から高山帯に棲むミヤマモンキチョウやタカネヒカゲ、草原に生息するオオルリシジミやゴマシジミ、落葉広葉樹林の林床に生息するギフチョウやヒメギフチョウなど、バラエティ豊かな環境にさまざまな種が生息しています。



ゴマシジミ



ギフチョウ



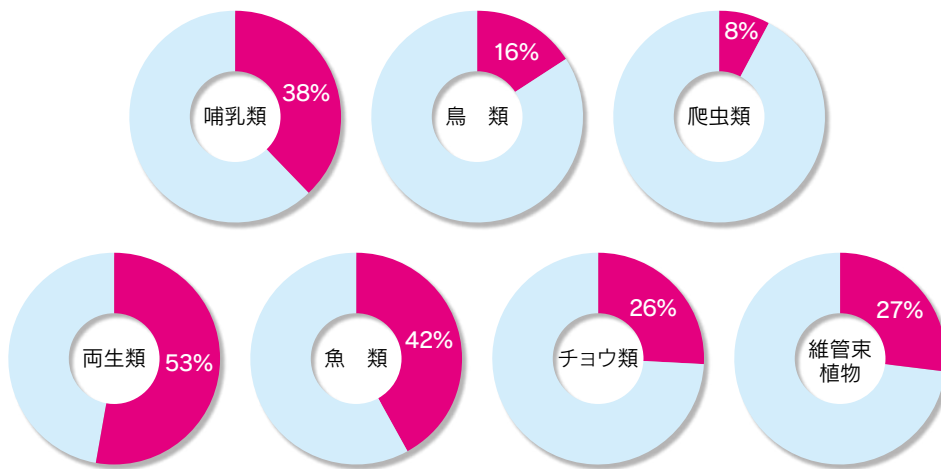
# II 絶滅危惧種とホットスポット

## ● 絶滅危惧種

長野県では複雑な地質、地形、気候、生物の進化や移動分散等の結果として、現在の生物多様性の姿が成立しました。長野県には、長野県とその周辺にのみ生息・生育している固有種や隔離分布種、希少種が数多く存在します。

しかし、長野県内においても生息・生育環境の人間による改変や耕作放棄による管理停止など、さま

ざまな要因により多くの動植物の生息・生育が脅かされています。すでにアマクサシダやスワモロコなど、維管束植物で18種、藻類で1種、脊椎動物で3種、無脊椎動物で5種が絶滅しています。また、ホシツリモ、トキ、サケなど、植物で2種、脊椎動物で3種が野生絶滅（飼育・栽培下でのみ存続）したと考えられています。



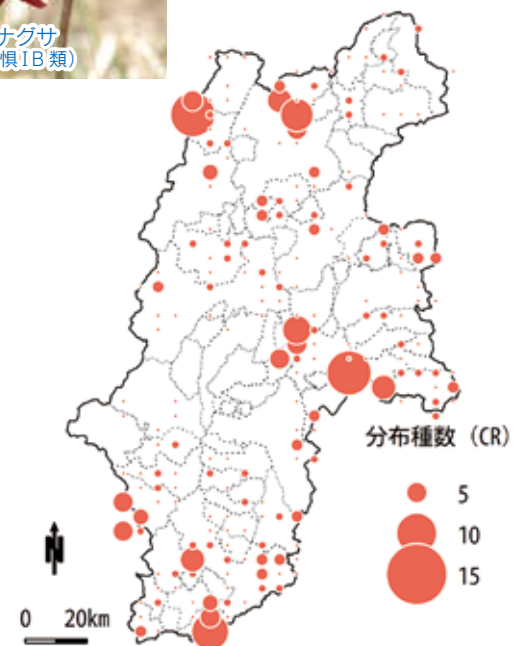
長野県内に生息・生育する在来種のうち、絶滅危惧種・準絶滅危惧種が占める割合  
 (資料:長野県版レッドリスト植物編(2014)・動物編(2015)から作成)



## ● 生物多様性ホットスポット

生物多様性が豊かで、かつ破壊が進んでいる地域のことを生物多様性ホットスポットといいます。国際 NGO コンサベーション・インターナショナルが植物の種数と生態系改変面積をもとに、世界で36ヶ所をホットスポットとして選んでいますが、そのうちの1つが日本です。

長野県版レッドリストで絶滅危惧IA類(ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種)に属する維管束植物の種数を見ると、北アルプス白馬岳周辺や中信高原、八ヶ岳周辺などで多いことがわかります。中信高原、八ヶ岳周辺、白馬岳周辺では、二ホンジカによる高山植物の採食が進行したり、心配される状況となったりしており、これらの地域が絶滅危惧植物から見た長野県の代表的なホットスポットであるといえます。



長野県版レッドリストで絶滅危惧IA類(CR)の維管束植物の分布密度

## || ささまざまな生態系の現状

### ● 森 林

長野県では森林が県土の約 8 割を占め、そのうち約 5 割が天然林(ブナ林やシラビソ林などの原生林、コナラ、シラカシなどの二次林)、約 4 割が人工林(カラマツ植林など)となっています。森林は鳥類や哺乳類などさまざまな動物の棲み処として利用されていますが、近年、人工林や二次林の利用休止や管理放棄によって自然遷移が進行しています。その結果、森林内が暗くなり、ササユリなどの明るい森林環境を好む種が減少しています。



### ● 草 原

長野県では、高山帯の草原や湿地のような自然草原のほかに、採草や火入れ、放牧など人間活動によってつくられた半自然草原があります。霧ヶ峰、美ヶ原、菅平などが代表的ですが、畦畔もそうした草原の一つです。

半自然草原はかつて放牧地や採草地などとして利用されてきましたが、1960 年前後からの利用減少により、長野県の面積の 3% にまで縮小しています。このため、アツモリソウやオオルリシジミ、オオジギ、コヨシキリなど、草原に依存している動植物では絶滅の危機に瀕しているものが少なくありません。



### ● 里 山

かつて里山の自然は、農林業や燃料の採取などを通じて私たち人間の生活に密接に関わっていましたが、生活の変化によって里山の生物資源の利用が減ってしまい、里山環境は急激に変化しています。

長野県の植物のなかで絶滅危惧種の約 5 割が里山環境に生育する種で、さらに絶滅種の約 7 割が里山環境に生育していたとのデータもあります。



### ● 河川・湖沼

長野県内の河川は千曲川をはじめ広く長い流域を持ち、さらに、諏訪湖や野尻湖など天然の湖沼や人工湖、ため池など大小さまざまな湖沼が存在しています。しかし、水質汚濁や河川改修、ダム建設などによる生息域の分断、外来種の増加などによって、河川・湖沼やその周辺に生息・生育する生き物に変化が生じています。

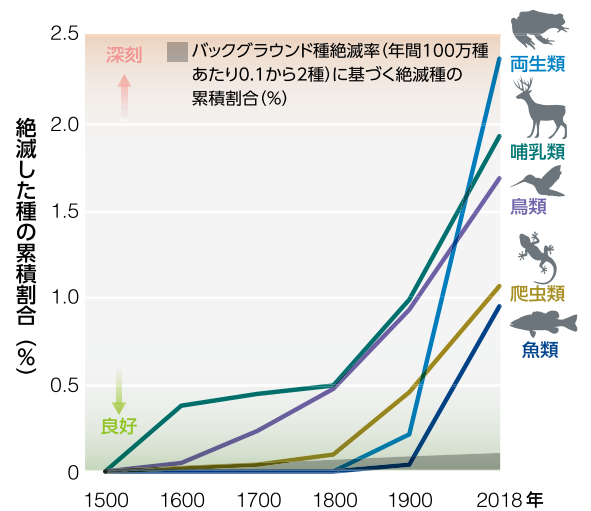




# 生物多様性に迫る危機

## 生物多様性を脅かす要因

種の絶滅は、生物進化の中では自然のプロセスであり、地球の長い歴史の中では恐竜のように多くの種が絶滅してきました。しかし最近の人間活動は、そうした自然に起きる絶滅と比べて1000倍もの早い速度で種の絶滅をもたらしていると試算されています。生物多様性国家戦略は、生物多様性に迫る危機を「4つの危機」として整理しています。また、この4つに加えて、資源利用による国外・県外への影響も私たちの生活に関係した重要な問題であるといえます。



1500年以降の脊椎動物の絶滅種の割合  
出典：IPBES (2019) 生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書 政策決定者向け要約 (環境省和訳)

### 第1の危機

私たち人間の生活や開発行為がもたらす直接的なダメージによるもの

### 第3の危機

外来種や化学物質の影響により、もともとあった生き物間のつながりが破壊されてしまうことにより起こるもの

### 第2の危機

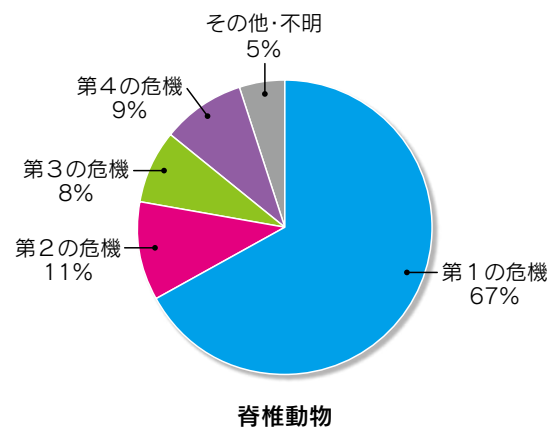
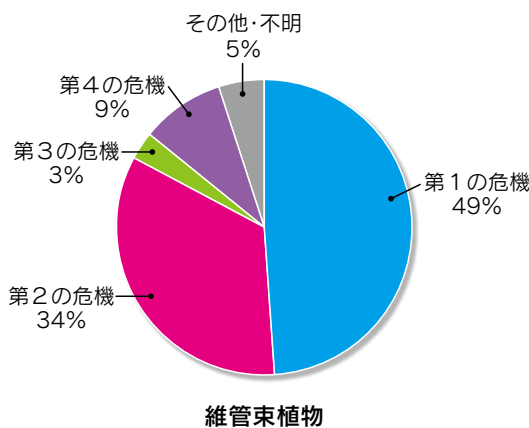
私たちの生活や社会経済の変化によって、自然に対する人間の働きかけが縮小・撤退したために起こるもの

### 第4の危機

地球温暖化をはじめとする地球環境の変化により、生物の分布や発生時期が変化することにより起こるもの

長野県も例外ではなく、長野県版レッドリスト植物編 (2014) と動物編 (2015) では32種が絶滅もしくは野生絶滅したとされています。また、現存する多くの種も、これらの危機により絶滅が心配されています。

長野県における絶滅のおそれのある維管束植物と脊椎動物の絶滅の危険性要因別の割合を示すと図のとおりです。第1の危機が多くを占めていますが、最近では第2の危機も大きな要因となってきました。



維管束植物と脊椎動物の危険性要因別の割合  
(長野県版レッドリスト植物編2014・動物編2015による)



## 第1の危機

## 人間活動や開発による危機

### ！ 開発や産業活動による影響

長野県版レッドリスト（2014年）では、植物の絶滅危惧要因として、開発行為や森林伐採が28%にのぼっています。また、魚類、水生昆虫類、貝類など水辺環境に生息する生き物は、陸上に暮らす生き物に比べて環境変化に対して逃げ場が少ないため、開発などによって大きな影響を受けやすいといえます。



農業生産性の向上を図るほ場整備

### ！ 乱獲・盗掘・違法捕獲による影響

野生生物を捕獲・採取によりとりすぎてしまうと、その生き物の数や生息・生育場所に悪影響をもたらすことがあります。長野県で絶滅した二ホンオオカミやニホンカワウソ、トキが絶滅した要因のひとつとして過剰な狩猟や駆除の影響が大きかったことが指摘されています。

最近では、ラン科やサクラソウなどの植物に対する園芸や観賞を目的とした採取（違法採取を含む）による影響が大きくなっています。動物では、オオルリシジミやオオイチモンジなど、希少な昆虫の違法捕獲が発生しています。



ササユリ



オオイチモンジ



サクラソウ

違法採取・捕獲の被害が多い  
ササユリ・サクラソウ・オオイチモンジ

### ！ 踏みつけによる影響

山岳県である長野県では、登山道沿いの高山植物等の「踏みつけ」が問題となっています。「踏みつけ」とは、人間によって地表面に生える植物が踏まれることによりダメージを受ける被害を指し、多くの登山客が訪れるところで顕著となります。特に高山帯や湿原に生育する植物は踏みつけに弱く、一度大きなダメージを受けてしまうと、その回復には長い期間がかかることが分かっています。



荒廃した登山道



## 第2の危機

## 自然に対する働きかけの縮小

### ！ 森林・草原・農地の利用衰退による影響

森林では、木材価格が長期にわたって低迷したことにより手入れ不足の人工林が増加し、また、雑木林では薪などの伐採利用がされなくなったことにより森林内が暗くなり、生育する植物相が変化し、林床の植物を餌としてきたギフチョウなどの昆虫の生息にも影響しています。

農地では、農業従事者の減少により耕作放棄地の拡大が問題となっています。2015年農林業センサスによると、長野県における農地全体に占める耕作放棄地の割合は19.4%と、全国割合の10.9%と比べても高い割合となっています。

気候が温暖で降水量も豊富な日本では、身のまわりにある草原の多くは、人間が手を加えない限りは自然に森林へと遷移していきます。長野県では、近年、草原の利用の減少により、森林化が進んでいます。

森林へと遷移する棚田



### ！ 中・大型哺乳類の分布拡大による影響



下草を食べつくすニホンジカ

長野県の野生鳥獣による農林業被害額は、ニホンジカによるものが最多となっています。採食により、高山植物や希少植物を含む植生を退行・消失させる生態系被害、野菜や樹木などの商品価値や生産量を低下させる農林業被害などが、大きな問題となっています。

生態系被害の例としては、長野県の特別指定希少野生動植物のタデスミレやヤシャイノデ、アツモリソウの個体数減少、生育個体の小型化が確認されています。シカによる植物の消失は、幼虫・成虫期のいずれも植物を利用するチョウ類への影響も大きく、食草の減少にともなってコヒョウモンモドキでは遺伝的多様性の低下も確認されました。

長野県ではニホンジカだけでなく、ニホンカモシカ、ニホンザル、イノシシ、ツキノワグマなどの分布が拡大していますが、これらの要因としては、狩猟者の減少による捕獲圧の低下、里山での人口や人間活動の低下などが挙げられています。



ネットの外ではシカの好まない植物が増加（仙丈ヶ岳）



## 第3の危機

## 人間により持ち込まれたものによる危機

### 外来種による影響

私たちは経済活動等にもとない世界中からいろいろな生き物を運び込んでいます。このように人間の活動にもとまって、それまでその地域にいなかった生き物が持ち込まれた場合、その生き物を「外来種（外来生物）」と呼びます。一部の外来種によって起こる問題は生物相や生態系に対する大きな脅威となっています。また、農林水産業や人間の生活へも被害が出ています。なかでも深刻な被害をもたらす外来種を侵略的外来種といいます。



オオキンケイギク



オオクチバス



ウチダザリガニ



アレチウリ

深刻な被害をもたらす外来種

### 特定外来生物

侵略的外来種の増加を背景に 2005 年に制定された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」では、生態系などに被害をおよぼす種を「特定外来生物」に指定し、飼育・運搬・輸入・放逐などを規制しています。長野県内でも 25 種の特定外来生物が確認されました（令和 5 年 2 月現在）。長野県では、とくに対策が必要な外来種について対策方法をまとめた「長野県版外来種対策ハンドブック」を作成して普及啓発に取り組んでいます。

長野県内で確認された特定外来生物（令和5年2月現在）

分類	種名	分類	種名	分類	種名
植物	オオキンケイギク	鳥類	カオグロガビチョウ	魚類	ガー科魚類
	オオハンゴンソウ		ソウシチョウ		チャンネルキャットフィッシュ
	オオカワチシャ		カナダガン	甲殻類	ウチダザリガニ
	アレチウリ	爬虫類	カミツキガメ	昆虫類	セイヨウオオマルハナバチ
	オオフサモ	両生類	ウシガエル		アカボシゴマダラ
	アゾラ・クリスタータ	魚類	カダヤシ		アカカミアリ
哺乳類	アライグマ		ブルーギル	クモ類	セアカゴケグモ
	アメリカミンク	コクチバス			
鳥類	ガビチョウ		オオクチバス		

長野県の外来種



### 化学物質（農薬など）による影響

化学物質は、市場に広く出回っているものだけでも数万種類あるとされ、DDT や有機スズ化合物のように生態系への影響が指摘されているものもあります。生態系への影響などが広く指摘された結果、減農薬の取り組みも広く行われるようになりました。長野県では、化学合成農薬や化学肥料の使用量低減のため、「信州の環境にやさしい農産物認証」の取得や有機農業の取り組みを推進し、環境に配慮した持続可能な農業を進めています。また近年、海洋プラスチックごみが世界的に問題になっており、海洋生物による誤食や、自然界で紫外線等により 5mm 以下となったマイクロプラスチックによる生態系への影響が懸念されています。海洋プラスチックごみの 7 割は陸域から発生するといわれており、内陸に位置する長野県としてもプラスチックと賢く付き合う「信州プラスチックスマート運動」の取り組みを推進しています。



## 第4の危機

### 地球環境の変化による影響

#### 地球温暖化による影響

地球温暖化の進行に伴う気候変動は、生物多様性を脅かす大きな要因となっています。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第6次評価報告書によると、今世紀末（2081～2100年）の地球の平均気温は1995～2014年に比べて最大で4.85℃上がると予測されています。また、長野県環境保全研究所などの研究では、今世紀末の長野県の平均気

温は1981～2000年に比べて最大で6.61℃上がること、北アルプスの冬の降雪量が極端化することなどが予測されています。気候変動が長野県の生き物や生態系にどのような影響を及ぼすかはまだ十分には明らかになっていませんが、以下のような影響が考えられています。

#### 気候変動がもたらす生き物や生態系への影響

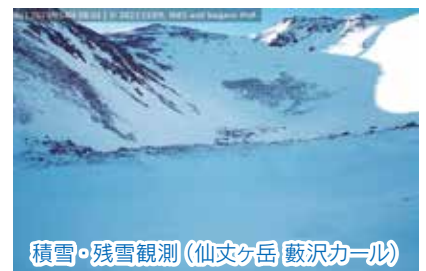
- 北方系の生き物の分布域の縮小（エゾゼミ、ライチョウなどの生息適域）
- 南方系の生き物の分布域の拡大（ナガサキアゲハ、モウソウチクなどの生息適域）
- 溪流魚の生息場所の縮小（イワナの生息場所の縮小と個体群の分断など）
- ブナ林や亜高山帯の森林の生育場所の縮小
- 生き物にとっての季節の変化による攪乱（かくらん）（植物の結実のずれなど）
- 農作物の質の低下や新たな病害虫の発生
- 積雪期の縮小によるニホンジカやイノシシの分布拡大や冬期の死亡率が下がることによる個体数の増加



#### 気候変動による高山生態系への影響

中部山岳の高山帯は、約1万年前までの氷期に日本列島に入り込んだ生き物の逃避地として知られています。高山植物やライチョウなどがそうした生き物にあたります。こうした生き物の多くは現在、北極をとり囲む地域に分布しており、中部山岳はその世界的な南限にあたります。その山頂域は島々のように孤立した環境で、気候変動に対して脆弱と考えられています。気温上昇によって植生帯の標高が全体的に上昇した場合、その最上部にある高山帯の生き物には逃げ場所がありません。このような高山生態系の保全は、世界的にも重要な課題です。

例えば、ライチョウは気温の上昇が進むと生息に必要な高山植物の分布域が縮小するため、中部山岳の多くの場所で生息に適した場所の消失が懸念されます。あとに残る生息地も孤立・分断化が進み、集団サイズや遺伝子の交流が小さくなって、絶滅の危険が大きくなるとされています。







## グローバルな資源利用による影響

世界の人間活動による地球環境へのダメージは、1970年代にその再生力の限界を超えたとされています。現在では徐々に地球環境の劣化が進んでいます。生物多様性問題は気候変動とならぶ世界的な環境問題の一つです。

日本は食料をはじめ、木材や燃料、鉱物など多くの資源を海外に依存しています。食料の自給率はカロリーベースで38%（2021年度）、木材の自給率は41%（2021年度）となっています。

他地域に対する資源依存は、農地開発や鉱山開発、森林伐採など、現地の生態系に悪い影響を与えている場合があります。私たちの日々の豊かな暮らしは、海外の生態系に大きく依存していることを自覚し、その保全にも目を向ける必要があります。

また、生態系への影響だけでなく、生産や輸送などの各段階で排出される温室効果ガスをCO<sub>2</sub>に換算して商品に表示する仕組みであるカーボンフットプリントや、環境や人、社会などに配慮した商品を選ぶエシカル消費などの考え方も広まってきています。

長野県は、野菜・きのこ・果物などの園芸作物を中心に多くの食料を供給していますが、長野県の食料自給率はカロリーベースで53%（2019年）にとどまっています。長野県では、県内で消費されるも食材をできる限り県外産から長野県産へ置き換える食の“地消地産”を推進し、食料自給率の向上だけでなく、農業振興や地域の活性化を推進しています。

### ◆対策の例

- フェアトレードの推進
- 信州の環境に優しい農産物認証制度の活用
- 地消地産・地産地消の推進
- 木材自給率の向上



ボルネオ熱帯雨林



アブラヤシ  
プランテーション開発



## 長野県の将来像

長野県の生物多様性の保全と持続可能な利用に関する基本的な計画である「第二次生物多様性ながの県戦略（第五次長野県環境基本計画（2023年3月策定）に包含）」では、2035年頃を目指す長野県の将来像を次のように示しています。

### 長野県ならではの生物多様性

様々な主体の連携・協働で自然環境工リアが拡大することにより、生態系ネットワークが形成され、本県ならではの生物多様性が保全

### 美しい景観

農地・草原・森林等の適切な管理、野生鳥獣による被害防止、生物多様性に配慮した農林業により美しい景観が保全

### 人と自然が共生する社会

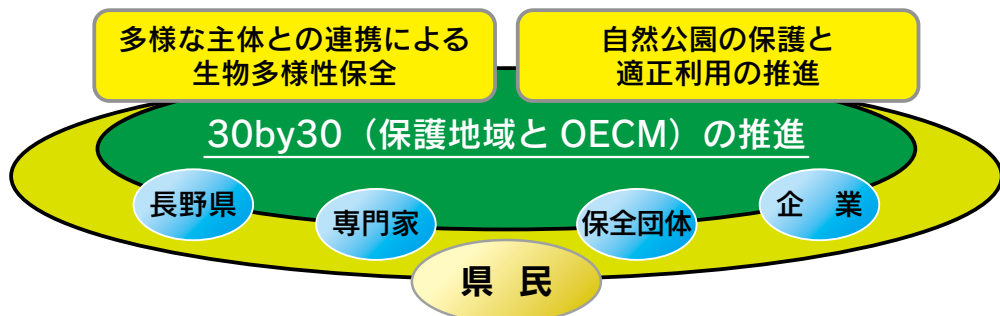
生態系や自然の恵みを活かして気候変動対策などの多様な社会課題の解決につなげる取組により、人と自然が共生する持続可能な社会が実現

### 自然とのふれあい

あらゆる主体が自然環境に配慮した行動を継続することにより、美しい景観が保全され、県内外から多くの方が訪問

これらの将来像を実現するために、長野県ではさまざまな施策に取り組むこととしています。その中には、2022年12月の生物多様性条約第15回締約国会議で採択された30by30やNbS(次ページ)に関わる目標の実現に向けた取り組みも含まれています。これらを実行していくためには、行政だけでなく企業や団体、県民などさまざまな主体が連携して取り組むことが必要です。

## 『人と自然が共生する持続可能な社会』の実現



### 生物多様性の保全

多様な動植物の保全対策

外来種対策の推進

### 自然環境(生態系)の保全

自然が有する多面的な機能の向上と活用

持続可能な農林業の推進

### 自然とのふれあいの推進

自然公園・自然環境保全地域等の適切な管理

自然公園の整備と利用促進

自然体験活動の推進



## 30by30 目標の実現に向けて

30by30 は、2030 年までに陸と海のそれぞれ 30%以上を保護地域と **OECM** にするという国際目標です。OECM (**O**ther **E**ffective area-based **C**onservation **M**easures) とは、保護地域（国立公園など）ではないが結果として自然が守られている地域のことです。日本の保護地域は、陸域 20.5%、海域 13.3% ですので、陸域ではあと 10%ほどを OECM に登録する必要があります。

長野県も約 21%が保護地域ですが、県内には手入れがされている里地里山や社寺林、企業有林、都市の緑地、環境教育に活用されている森林など、本来の目的に関わらず生物多様性の保全が図られている区域が多くあります。これらの自然共生サイトが国から認定され、OECM の登録に繋がるようさまざまな主体の連携による取り組みが期待されます。



希少野生動植物生息地の環境整備



ボランティアによる植生調査

## 自然の恵みを活かした多様な社会課題の解決

自然の力を活用して社会的な課題を解決しようとする考え方が **NbS** (**N**ature-**b**ased **S**olutions) です。気候変動や自然災害、社会と経済の発展、人間の健康など、私たちの社会をとりまく課題の解決を主目的としつつも、しっかりと自然に根ざして解決していこうとする考え方で、最近注目されています。



高齢者による絶滅危惧種のチョウの保全活動  
(自然を活かした健康と生きがいづくり)



スキー場のグリーンシーズン利用  
(自然を活かした持続可能な観光)

## 参考情報

●長野県環境保全研究所

研究成果の紹介や学習交流事業の案内

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/>



●長野県環境部自然保護課

希少野生動植物保護対策や外来種対策の紹介

<https://www.pref.nagano.lg.jp/shizenhogo/kensei/soshiki/soshiki/kencho/shizen/index.html>



●第五次長野県環境基本計画

環境の保全に関する総合的な計画。第二次生物多様性ながの県戦略としても位置付け

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kankyo/kurashi/kankyo/shisaku/5ji/keikaku.html>



●信州環境カレッジ

さまざまな主体が実施する環境に関する講座情報を発信し、県民の学びを拡大

<https://shinshu-ecollege.pref.nagano.lg.jp/>



●信州生物多様性ネットきずな

長野県内で生物多様性の保全に取り組む団体等のネットワーク化を推進

<http://shinshu-bdn-kizuna.blogspot.com/>



●環境にやさしい農業（長野県農政部農業技術課）

信州の環境にやさしい農産物認証制度やエコファーマーの紹介

<https://www.pref.nagano.lg.jp/nogi/sangyo/nogyo/kankyo-top.html>



●長野県版エシカル消費 Ethical Style Nagano

「エシカル消費」に健康を加えた「長野県版エシカル消費」を推進

<https://www.nagano-shohi.net/ethical>



共に育み 未来につなぐ  
長野県の生物多様性  
令和5年（2023年）3月

発行：長野県環境保全研究所  
〒381-0075 長野市北郷 2054-120  
電話：026-239-1031  
FAX：026-239-2929  
メール：kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp  
URL：<http://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/>



しあわせ信州